Nagoya City University

保健所における本学部地域看護学実習の方法の検討　－第2報－

尾　﨑　伊都子・山　口　洋　子・白　井　みどり
門　間　晶　子・舘　　英津子

Study of the Method of Community Health Nursing Practicum at Public Health Center in Nagoya City University School of Nursing － Part 2 －

OZAKI Itsuko,　YAMAGUCHI Yoko,　SHIRAI Midori,
KADOMA Akiko,　TACHI Etsuko

キーワード：地域看護学実習、保健所、保健師、看護学生、実習方法
Key words：community health nursing practicum, public health center, public health nurses, nursing students, method of nursing practicum

Ⅰ　はじめに

保健師養成のための教育機関は現在、保健師養成所や短期大学専攻科、大学など様々な教育課程が存在している。特に大学は平成5年前後から急増し、平成8年にはその数が養成所を上まわり、保健師教育を大学で受ける学生が多くを占めるようになっている[1]。また、平成9年に看護教育のカリキュラムが改正され、養成所や学校など各校が教育方法を工夫し、独自性のあるカリキュラムで看護教育を行うことが求められるようになった。このような教育課程の変化に伴い、大学では保健師と看護師の教育を一本化する統合カリキュラムのもとで、保健師教育をどのように位置づけ、何を教えるのか試行錯誤の段階にあり、各大学が教育経験を蓄積していくことが求められている[2]。このことは実習施設においても同様であり、これまで養成所の保健師学生の実習指導にあたってきた現場の保健師は、学校側の考えが分からない、各学校の教育目標が異なるためどこに焦点を絞って指導すればよいか分からない、などの課題を感じていると言われている[3][4]。また、全国保健師長会が行った調査によると、保健師は実習指導にあたり、「指導時間が十分にとれない」「所内の他部署や他機関との調整」「効果的な指導の方法が分からない」「指導のマニュアルがない」などに苦労していると報告されている[5]。保健師教育課程が多様化する中で、実習のあり方には様々な課題があると言えよう。

平成11年に開設された本学部は、統合カリキュラムによる教育を行っており、平成14年度から地域看護学実習を開始した。実習を開始するにあたり事前に、実習目的・目標に対して保健師の理解が得られるか、また保健師活動の基本となる地域特性を理解するための学習方法の実現可能性を問うため、保健師を対象に質問紙調査を行った[6]。その結果から、実習目的・目標の到達度をより具体的に表現する必要性が示唆され、実習目標ごとに観点を示した。地域特性を理解するための学習方法については、各実習施設の活動上の特性を生かすよう柔軟に調整していく必要があると考え、その具体的な進め方について実習開始前に教員が各施設の臨地実習指導者と打ち合わせを行った。しかし、実際に実習を開始すると、実習計画に盛り込む学習内容や指導内容が臨地実習指導者によって異なることがあり、実習に対する基本的な考え方に差があると考えられた。また、学生にとって保健所で

名古屋市立大学看護学部（地域看護学）
Nagoya City University School of Nursing (Community Health Nursing)

NII-Electronic Library Service

Nagoya City University

表１　実習目的・目標および地域特性を理解するための学習活動

目　　的		地域に暮らす人々の生活実態と健康上の問題とをあわせて把握し、個人、家族、集団に対する看護の取り組みを実践的に学ぶ。
目　　標	1）	生活の場としての地域の特性を把握し、その地域の顕在的・潜在的な健康上の問題を理解することができる。
	2）	特定の地域を対象とした看護活動に主体的に参加し、その企画・実行・評価および調整のあり方を具体的に理解することができる。
	3）	地域の人々自らが健康上の問題の解決に向けて資源を活用・調整、組織化するプロセスを確認し、そのための援助について考察することができる。
	4）	訪問をはじめとした看護活動の実践を通して、個人とその家族の生活に即した援助の方法について考察することができる。
	5）	地域の保健医療福祉システムの現状を明らかにし、そのシステムに関わる人々の役割と連携のあり方について考察することができる。
	6）	地域の健康向上のための看護の役割について考察することができる。
地域の特性を理解するための主な学習活動	1）	既存資料(保健統計、活動報告など)による情報収集・整理
	2）	キーパーソン(自治会長、民生委員など)や住民へのインタビュー
	3）	地区踏査(自ら地域に出て観察する方法)
	4）	情報の分析・まとめ

表２　実習内容と単位数の目安

実　習　内　容	単位数
実習初日の施設内オリエンテーション	1
保健事業（健康診査、健康相談、健康教育、機能訓練、地区組織活動など。＊結核審査会、サービス調整会議への参加なども含む。）	6～10
家庭訪問	1～2
受け持ち地域の理解に関する学習（既存資料の収集・整理、インタビュー、地区踏査、情報の分析・まとめ）	6
保健事業や家庭訪問に関する学習	3
まとめおよび最終カンファレンス	1
計	20

半日＝１単位とする

の実習の環境や方法は、それまでの病院を中心とした臨床実習のそれらと大きく異なるため戸惑いや不安が大きく、消極的な実習態度となる学生もいた。本学部は地域看護学実習を開始して２年目であり、実習状況に関する具体的な情報を分析した結果から、課題や改善点を明確にしていく必要がある。そのためには、臨地実習指導者の実習内容に対する意見や学生に対して特に指導を要したこと、学生が学習活動を進めるにあたり困難に感じたことなどについて、実習状況を具体的に知ることが重要であると考える。

そこで、保健所での実習における本学部学生の学習状況と臨地実習指導者の指導状況を把握し、今後の実習内容および方法を検討する目的で、質問紙調査を行ったので報告する。

Ⅱ　方　　法

１．地域看護学実習の方法

本学部の地域看護学実習は、健康相談や健康教育、家庭訪問などの様々な地域看護活動に参加して支援活動の実際を学ぶとともに、これらの基本となる地域特性を理解する方法を学ぶことを大きな柱としている。地域看護学に関連する授業科目は２年次前期から３年次後期わたって、他の専門専攻科目と平行して開講されている。地域看護方法論では、地域看護活動の基本的な支援方法を具体的に理解できるよう、講義とグループワークによる演習を併せて展開している。地域特性を理解する方法については、グループごとに一人の学生の居住地域を例にして、情報収集、分析、まとめを体験する演習を行っている。

実習の時期は、病院における臨床実習の終了後の４年次前期である。期間は３週間で、そのうちの２週間を保健所で、１週間を訪問看護ステーションで行い、公衆衛生看護と在宅看護を同時に学ぶ内容としている。表１に、本学部の地域看護学実習の目的・目標、および地域特性を理解するための主な学習活動を示した。また、表２に、保健所の実習計画に盛り込む実習内容とその単位数（半日を１単位とする）の目安を示した。実習目的・目標や実習計画の立案方法、学習の進め方などについて学生と臨地実習指導者に解説するため、「地域看護学実習の手引き」を作成している。この中で、地域特性を理解するための方法として、受け持ち地域を定め、既存資料による情報収集、住民へのインタビュー、地区踏査などの学習活動に取り組むこととしている。学生80人の配置は、政令市の保健所10箇所に50人、県の保健所３箇所に20人、中核市の保健所１箇所に10人である。

NII-Electronic Library Service

Nagoya City University

2．調査対象と調査内容

1）学生への調査

平成15年6月30日から7月25日まで地域看護学実習を行った4年生80人を対象に、自記式調査票を用いた調査を行った。調査は、実習記録と課題レポートの提出日の8月6日に、提出に来た順に学生個々に依頼し、同意の得られた者に行った。

調査内容は、実習内容の単位数に対する意見、地域特性を理解するための学習活動の実施状況と困ったこと、実習施設などである。実習内容の単位数についての意見は、実習の手引きに示した目安について、「多い」「妥当」「少ない」のいずれかの回答を選択するよう求めた。地域特性を理解するための学習活動の実施状況は、各学習活動について実施の有無を尋ねた。また、それらの学習の過程や実施後に考えたことを臨地実習指導者に報告・相談したかについて、「学生から主体的に報告・相談した」「臨地実習指導者から求められて報告・相談した」「報告・相談しなかった」のいずれかの回答を選択するよう求めた。さらに、それぞれの学習活動に関して困ったことを自由に記載するよう求めた。

2）臨地実習指導者への調査

平成15年度本学部地域看護学実習において学生指導を行った保健師49人を対象に、自記式調査票を用いた郵送留置調査を行った。調査期間は平成15年8月22日から9月3日までとした。

調査の内容は、実習指導体制、実習内容の単位数に対する意見、地域特性を理解するための学習活動の実施状況と特に学生に指導したこと、回答者の属性などである。実習指導体制は、学生の指導方法、臨地実習指導者の選任基準、および実習期間中に学生の話を聞くために工夫したことについて尋ねた。実習内容の単位数についての意見は学生への質問と同様の質問項目で尋ねた。地域特性を理解するための学習活動の実施状況は、それぞれの学習活動について学生の実施の有無を尋ね、特に学生に指導したことを自由に記載するよう求めた。

3）倫理的配慮

学生への倫理的配慮として、研究の目的および方法、また調査への協力は自由であり、協力しない場合も実習の評価・成績に不利にならないことについて、口頭および書面で説明した。なお、プライバシーの保護に配慮するため、学生の実習施設は分析項目から除外した。

臨地実習指導者への倫理的配慮として、研究の目的および方法、また調査への協力は自由であることを書面で説明し、調査票は個々に返信用封筒で厳封して返送するよう依頼した。また、プライバシーの保護に配慮するため、調査項目から所属施設は除いた。

Ⅲ　結　　果

1．学生への調査結果

調査票の回収数は71人（回収率88.6%）であった。

1）実習内容の単位数についての意見

実習内容の単位数に対する意見を表3に示した。「実習初日の施設内オリエンテーション」「家庭訪問」と「まとめおよび最終カンファレンス」については、57人(80.3%)から67人(94.4%)がその単位数を「妥当」と回答した。「受け持ち地域の理解に関する学習」と「保健事業や家庭訪問に関する学習」の単位数は、いずれも23人(32.4%)が「少ない」と回答した。「保健事業」の単位数は、18人(25.4%)が「多い」と答えた。

2）地域特性を理解するための学習活動の報告・相談の状況

地域特性を理解するための学習活動の実施の有無については、「既存資料による情報収集・整理」はすべての学生が行っていた。「キーパーソンや住民へのインタビュー」は行った者44人(62.0%)、行わなかった者27人(38.0%)であった。「地区踏査」および「情報

表3　実習内容の単位数に対する学生と指導者の意見　　学生 n=71／指導者 n=42　人数(%)

実習内容	多い		妥当		少ない		無回答	
	学生	指導者	学生	指導者	学生	指導者	学生	指導者
実習初日施設内オリエンテーション	14(19.7)	1(2.4)	57(80.3)	39(92.9)	0(0.0)	1(2.4)	0(0.0)	1(2.4)
保健事業	18(25.4)	4(9.5)	46(64.8)	25(59.5)	6(8.5)	13(30.0)	1(1.4)	0(0.0)
家庭訪問	0(0.0)	0(0.0)	66(93.0)	29(69.0)	5(7.0)	13(30.0)	0(0.0)	0(0.0)
受け持ち地域の理解に関する学習	7(9.9)	21(50.0)	41(57.7)	18(42.9)	23(32.4)	3(7.1)	0(0.0)	0(0.0)
保健事業や家庭訪問に関する学習	5(7.0)	18(42.9)	43(60.6)	20(47.6)	23(32.4)	4(9.5)	0(0.0)	0(0.0)
まとめおよび最終カンファレンス	2(2.8)	2(4.8)	67(94.4)	37(88.1)	2(2.8)	3(7.1)	0(0.0)	0(0.0)

NII-Electronic Library Service

Nagoya City University

表４　各学習活動を行った学生の臨地実習指導者への報告・相談の状況　　人数(%)

学習活動と質問項目	n	学生が主体的に報告・相談した	指導者に求められて報告・相談した	報告・相談しなかった	無回答
「既存資料による情報収集・整理」の過程で報告・相談したか	71(100.0)	26(36.6)	26(36.6)	18(25.4)	1(1.4)
「キーパーソンや住民へのインタビュー」を行って考えたことを報告・相談したか	44(100.0)	25(56.8)	8(18.2)	11(25.0)	0(0.0)
「地区踏査」を行って考えたことを報告・相談したか	60(100.0)	37(61.7)	19(31.7)	4(6.7)	0(0.0)
「情報の分析・まとめ」の過程で報告・相談したか	60(100.0)	27(45.0)	16(26.7)	13(21.7)	4(6.7)

の分析・まとめ」はいずれも、行った者60人(84.5%)、行わなかった者11人(15.5%)であった。

各学習活動を行った者について、その際の臨地実習指導者への報告・相談の状況を表４に示した。臨地実習指導者に報告・相談しなかったと答えた者の割合は、「既存資料による情報収集・整理」25.4%、「キーパーソンや住民へのインタビュー」25.0%、「情報の分析・まとめ」21.7%が多かった。指導者に求められて報告・相談した者の割合は、「既存資料による情報収集・整理」36.6%、「地区踏査」31.7%が多かった。

３）地域特性を理解するための学習活動に関して困ったこと

地域特性を理解するための学習活動を行う上で困ったことに関する記載を、類似する内容ごとに分類し、項目を立てて整理した。その際、学習活動を行った者と行わなかった者の記載は別々に整理し、行った者の記載のみ表５に示した。

「既存資料による情報収集・整理」については51件の記載があった。件数が多い項目は「資料の収集方法」27件で、その記載内容は、求めている資料がなかった、受け持った特定地域の資料がなかったなどであった。次いで、「学習の目的・内容」14件、「資料の整理方法」13件であった。その他の項目として、「報告・相談」「時間」「グループワークの進め方」があった。

「キーパーソンや住民へのインタビュー」については24件の記載があった。件数が多い項目は、緊張して聞きたいことが聞けなかったなど「インタビューの方法」、および、対象者と自分の予定が合わなかったなど「時間」がいずれも９件であった。その他の項目として、「報告・相談」「学習の目的・内容」「保健所の活動上の特性」「グループワークの進め方」があった。行わなかった者の記載は５件あり、対象者と自分の予定が合わなかったという「時間」３件、事前にインタビューする内容を検討しなかったという「学習の目的・内容」および、保健師に自分の考えを説明することができなかったという「報告・相談」がいずれも1件あった。

「地区踏査」については28件の記載があった。件数が多い項目は、地区踏査をどのように進めればよいか分からなかったなど「学習の目的・内容」12件、天候不良や交通手段がなかったなど「地区踏査の方法」11件であった。その他の項目として、「時間」「報告・相談」「結果の整理方法」があった。行わなかった者の記載は３件あり、保健師に自分の考えを説明することができなかったという「報告・相談」、地区踏査をどのように進めればよいか分からなかったという「学習の目的・内容」、時間が十分になかったという「時間」であった。

「情報の分析・まとめ」については11件の記載があった。件数が多い項目は、情報をどのように分析していけばよいか分からなかったなど「分析・まとめの方法」7件であった。その他の項目として、「時間」「グループワークの進め方」「報告・相談」があった。行わなかった者の記載は５件あり、時間がなく保健師に相談できなかったという「報告・相談」２件、得られた情報をどのように分析していけばよいか分からなかったという「分析・まとめの方法」２件、時間が十分になかったという「時間」1件であった。

２．臨地実習指導者への調査結果

調査票の回収数は42人（回収率85.7%）であった。

１）臨地実習指導者の属性

臨地実習指導者の属性を表６に示した。平均年齢は39.8歳であり、40歳代15人(35.7%)、30歳代14人(33.3%)が多かった。保健師としての経験年数は平均14.6年であり、10～19年13人(31.0%)、20～29年12人(28.6%)が多かった。教育機関は看護師、保健師とも専門学校が多く、それぞれ24人(57.1%)、35人(83.3%)で

NII-Electronic Library Service

Nagoya City University

表5　地域特性を理解するための学習活動を行った学生が困ったこと

学習活動	項目	件数	記載内容
既存資料による情報収集・整理 n＝51	報告・相談	9	保健師が忙しく相談できなかった（5） 保健師に相談しにくかった（3） 保健師に自分の考えを説明できなかった（1）
	学習の目的・内容	14	どのような資料を収集すればよいか分からなかった（13） 学内の講義での学習・理解が不足していた（1）
	資料の収集方法	27	求めている資料がなかった（8） 受け持った特定地域の資料がなかった（7） 比較したい資料がなかった（4） 資料を見つけるのが難しかった（4） 特定の活動領域の資料がなかった（2） 保健所にない資料は収集できなかった（1） 保健所にない資料を収集するのが大変だった（1）
	資料の整理方法	13	資料を整理する方法がわからなかった（8） 資料が分かりにくかった（3） 資料をどのように活用してよいか分からなかった（2）
	時間	5	時間が十分なかった（3） 実習前に情報収集をする時間がなかった（2）
	グループワークの進め方	2	グループメンバーの考えをまとめるのが難しかった（2）
キーパーソンや住民へのインタビュー n＝24	報告・相談	3	事前に自分の考えを保健師に説明することができなかった（3）
	学習の目的・内容	3	事前にインタビューの内容を検討せずに行った（3）
	インタビューの方法	9	緊張して聞きたいことが聞けなかった（5） インタビューをはじめるきっかけが分からなかった（2） 茶菓の断り方が分からなかった（2）
	時間	9	対象者と自分の予定が合わなかった（4） インタビューする時間が十分とれなかった（3） 対象として職員は忙しいので話しかけにくかった（1） 事前にインタビューの計画を打合せする時間がなかった（1）
	保健所の活動上の特性	1	実習した施設では希望する対象者との接触が難しかった（1）
	グループワークの進め方	1	グループメンバーの考えをまとめるのが難しかった（1）
地区踏査 n＝28	報告・相談	2	指導者に相談する機会がもてなかった（1） 指導者に報告・相談した内容が十分に伝わっていなかった（1）
	学習の目的・内容	12	地区踏査をどのように進めればよいか分からなかった（7） 地域を見る視点を絞ることが難しかった（3） 学内の講義での学習・理解が不足していた（2）
	地区踏査の方法	11	天候が悪かった（4） 交通手段がなかった（3） 実習中に地区踏査を行う時期をうまく計画できなかった（2） 受け持ち地域が広域だったので一部の地域しか地区踏査できなかった（2）
	結果の整理方法	1	地区踏査の結果をどのようにまとめればよいか分からなかった（1）
	時間	7	時間が十分になかった（6） 地区踏査を優先したため保健事業に十分参加できなかった（1）
情報の分析・まとめ n＝11	報告・相談	1	指導者が忙しく相談できなかった（1）
	分析・まとめの方法	7	情報をどのように分析していけばよいか分からなかった（3） レポートの形式やまとめ方が分からなかった（2） 部分的な情報をどのようにまとめればよいか分からなかった（1） テーマを絞れなかったため理解を深めることができなかった（1）
	時間	4	時間が十分なかった（3） 保健事業を優先したため時間がなかった（1）
	グループワークの進め方	2	グループで揃ってまとめる時間がとれなかった（2）

NII-Electronic Library Service

Nagoya City University

表６　臨地実習指導者の属性　n＝42

		人数	%
年　齢	～29	5	11.9
	30～39	14	33.3
	40～49	15	35.7
	50～59	6	14.3
	無回答	2	4.8
保健師としての勤務年数	～3	5	11.9
	4～9	9	21.4
	10～19	13	31.0
	20～29	12	28.6
	30～39	1	2.4
	無回答	2	4.8
看護師としての教育機関	専門学校	24	57.1
	短大	12	28.6
	4年制大学	4	9.5
	無回答	2	4.8
保健師としての教育機関	専門学校	35	83.3
	短大	0	0.0
	4年制大学	5	11.9
	無回答	2	4.8
4年生看護大学の実習指導経験	あり	31	73.8
	なし	9	21.4
	無回答	2	4.8

あった。4年制大学の実習指導経験がある者は31人(73.8%)であった。

2）実習指導体制

学生の指導方法は、「学生１名に対し、保健師１名が常時指導した」19人(45.2%)、「連絡等の窓口として臨地実習指導者を定めたが、実習期間中の実習指導は各々の事業担当者が指導した」14人(33.3%)であった。臨地実習指導者の選任基準は、「特に決めていない」23人(54.8%)、「一定の経験年数者」13人(30.9%)であった。実習期間中に学生の話や質問を聞くために工夫したことを表７に示した。「話す時間がない時は、記録にコメントを書いて返した」30人(71.4%)、「自分が学生に対応できない時は、他の保健師に依頼した」26人(61.9%)が多かった。

3）実習内容の単位数に対する意見

実習内容の単位数についての意見を表３に示した。「実習初日の施設内オリエンテーション」については39人(92.9%)、「まとめおよび最終カンファレンス」は37人(88.1%)が、その単位数を「妥当」と回答した。「家庭訪問」および「保健事業」の単位数は、いずれも13人(30.0%)が「少ない」と答えた。「受け持ち地域の理解に関する学習」については21人(50.0%)、「保健事業や家庭訪問に関する学習」は18人(42.9%)が、その単位数を「多い」と回答した。

4）地域特性を理解するための学習活動に関して特に学生に指導したこと

地域特性を理解するための学習活動に関して特に学生に指導したことについての記載を、類似する内容ごとに分類し、項目を立てて整理したものを表８に示した。

「既存資料による情報収集・整理」については26件の記載があった。件数が多い項目は、情報収集の目的を明確にするよう指導したなど「学習の目的・内容」15件、既存資料の入手方法や場所を説明したなど「資料の収集方法」14件であった。その他の項目として、「資料の整理方法」「報告・相談」があった。

「キーパーソンや住民へのインタビュー」については23件の記載があった。件数が多い項目は、インタビューの目的・内容を考えてから行うよう指導したなど「学習の目的・内容」15件、インタビューの際の礼儀作法について指導したなど「インタビューの方法」12件であった。その他の項目として、「報告・相談」「結果の整理方法」があった。

「地区踏査」については23件の記載があった。件数が多い項目は、地区踏査による情報収集の手段を指導したなど「地区踏査の方法」15件、地区踏査の目的を明確にしてから行うよう指導したなど「学習の目的・内容」13件であった。その他の項目として、「結果の整理方法」「事故予防」「報告・相談」があった。

「情報の分析・まとめ」については10件の記載があった。情報に偏りがないか吟味するよう指導したなど「分析・まとめの方法」17件であった。その他の項目として、「報告・相談」があった。

Ⅳ　考　　察

1．地域特性を理解する学習活動について配慮すべきこと

1）　学生から主体的に臨地実習指導者に報告・相談する姿勢を育てる

地域特性を理解するための各学習活動の過程や実施後に考えたことを、臨地実習指導者に報告・相談しなかった学生は、「既存資料による情報収集・整理」「キーパーソンや住民へのインタビュー」「情報の分析・まとめ」で20%以上いた。すべての学習活動で70%以上の学生が臨地実習指導者への報告・相談を行っているものの、指導者に求められて報告・相談した学生が18.2%から36.6%いた。臨地実習指導者への報告・相談に関しては、学生が各学習活動を行う上で困ったことに関する記載に、保健師が忙しく相談できなかったなど「報告・相談」の項目があった。臨地実習指導者

NII-Electronic Library Service

Nagoya City University

表7　実習期間中に学生の話や質問を聞くために工夫したこと

n＝42

	人数	%
昼休みや事業終了後などに時間を作り、学生と関わった	22	52.4
自分が学生に対応できない時は、他の保健師に依頼した	26	61.9
次の日以降で時間を調整して、時間をとった	17	40.5
話す時間がないときは、記録にコメントを書いて返した	30	71.4
特に工夫しなかった	3	7.1
その他	3	7.1

表中の人数は重複回答である

表8　地域特性を理解する学習活動に関して特に学生に指導したこと

学習活動	項目	件数	記載内容
既存資料による情報収集・整理 n＝26	報告・相談	3	学習の過程で指導者と話し合うよう指導した（3）
	学習の目的・内容	15	情報収集の目的を明確にするよう指導した（9） 情報を収集する視点を説明した（3） 既存資料以外の情報も必要であることを説明した（3）
	資料の収集方法	14	既存資料の入手方法を説明した（7） 既存資料の場所を説明した（4） 保健所にある資料以外も活用するよう指導した（2） 保健所が所有している資料について説明した（1）
	資料の整理方法	7	既存資料を整理する視点を説明した（4） 統計を比較して整理することを説明した（2） 資料の出典を明確にするよう指導した（1）
キーパーソンや住民へのインタビュー n＝23	報告・相談	2	事前に指導者に相談するよう指導した（1） 困った時に指導者に相談するよう指導した（1）
	学習の目的・内容	15	インタビューの目的・内容を考えてから行うよう指導した（6） インタビューの視点を指導した（5） キーパーソンの役割について説明した（4）
	インタビューの方法	12	インタビューの際の礼儀作法について指導した（4） インタビューする対象の選定について指導した（3） インタビューする際の姿勢について指導した（3） インタビューができる場について指導した（2）
	結果の整理方法	1	インタビューで得た結果の解釈の仕方について指導した（1）
地区踏査 n＝23	報告・相談	1	指導者に報告をするよう指導した（1）
	学習の目的・内容	13	地区踏査の目的・内容を明確にしてから行うよう指導した（5） 地域を見る視点を指導した（5） 地区踏査を行う地域を明確にするよう指導した（2） 事前準備をするよう指導した（1）
	地区踏査の方法	15	地区踏査による情報収集の具体的な手段について指導した（4） 地区踏査で住民と接する時に気をつけることを指導した（4） 地区踏査を行う具体的な場所を提案した（3） 日常業務でも地域を観察できることを指導した（2） 地区踏査を行う時間帯について指導した（1） 実習中に地区踏査を行う時期について指導した（1）
	結果の整理方法	4	地区踏査による地域の特性の捉え方について指導した（3） 地区踏査で得た結果の解釈の仕方について指導した（1）
	事故予防	2	交通事故に気をつけるよう指導した（2）
情報の分析・まとめ n＝10	報告・相談	1	学習の過程で指導者に相談するよう助言した（1）
	分析・まとめの方法	17	情報に偏りがないか吟味するよう指導した（5） 保健師としての視点を明確にするよう指導した（3） 自分自身が実習で考えたことをまとめるよう指導した（3） 情報には見る、聞くことにより得られるものがあることを説明した（2） 情報の分析と感想は区別するよう指導した（2） 得られた情報のつながりを考えて分析するよう指導した（1） 情報を蓄積することの必要性を説明した（1）

NII-Electronic Library Service

Nagoya City University

は日常業務を行いながら実習指導を行うため、ほとんどの者が「話す時間がない時は、記録にコメントを書いて返した」「自分が学生に対応できない時は、他の保健師に依頼した」などの工夫をしたと答えており、特に工夫しなかった者は少なかった。

倉持らは保健所等における実習の受け入れ状況に関する調査を行い、「保健婦が臨地実習指導者としての責任を果たす強い意思をもつ一方で、限られた保健婦数で過密な業務に追われながら学生の実習指導に最善を尽くそうとしている現状とのジレンマがある」と述べている[5]。本調査においても、過密な日常業務に追われながらも、スタッフ全体で学生の指導を行うよう工夫や配慮をしていた実状がうかがえる。一方、学生は保健師が忙しく業務に従事している姿を見て相談しにくいと感じたり、いつ相談したらよいか分からないまま相談できなかったりという状況があったと考えられる。保健師の活動の場は地域全体であるため、事務所内の席にいる時間が少ないのは当然であろう。また、学生が体験する保健事業や地区活動によっては、臨地実習指導者以外の保健師から指導を受けることもある。実習体験を単なる見学で終わらせないためには、それらを通して感じたことや考えたことについて保健師と積極的に意見交換し、学習の幅を広げることが大切であることを、改めて学生に伝える必要がある。また、学生であっても実習では看護に携わる一員としての立場を自覚し、保健師からの助言を受けるための時間を主体的に調整する姿勢を育てることが必要である。

2）　実習前の学生の学習準備状態を高める

学生は地域特性を理解するためのいずれの学習活動においても、どのような資料を収集すればよいか分からなかった、事前にインタビューの内容を検討しなかった、地区踏査をどのように進めればよいか分からなかったなど、「学習の目的・内容」に関して困難を感じていた。一方、臨地実習指導者は「学習の目的・内容」について指導した者が多く、学生の困難に対応した指導をしていた。このように、学生は各学習活動の目的・内容を明確にすること自体が困難であり、臨地実習指導者の具体的な指導が必要であったと考えられる。

池田らは、実習での地区踏査の学習状況を分析し、「『五感を使って』という漠然とした指示では、感性豊かに多くの情報を得られる学生と、単なる地理的・物理的情報の地図落としにとどまる学生の格差があった」という課題を明らかにしている[7]。そして、実習施設での実習に先立ち地区踏査を実際に行うことや、地域を観察する方法をより具体的に実践できるようなガイドラインを示すことが必要であると述べている。実習に赴いた時に学生自身が各学習活動の目的・内容を明確にすることができるよう、学習準備状態を高めることが必要である。そのため、実習で効果的に学習活動を実践することを目指して、今後、学内での講義・演習の方法を見直していく必要がある。また、実習を行うにあたっては、地域特性を理解するための学習活動についてより具体的な視点や方法を示す必要があると考える。

3）　地域に特徴的な地域看護活動の事例を学生に提示する

臨地実習指導者が各学習活動に関して指導したこととして、「資料の収集方法」「インタビューの方法」「地区踏査の方法」「分析・まとめの方法」の項目には、具体的な実践方法の記載内容が含まれていた。例えば、「キーパーソンや住民へのインタビュー」では、インタビューする対象の選定やインタビューができる場について指導していた。また、「地区踏査」では、地区踏査を行う具体的な場所や時間帯を指導していた。

ほとんどの学生が、実習という機会を得て初めて実習施設の管轄地域に出向くことになる。そのため、どのような対象者にインタビューするとよいか、どのような場所に行くと住民の生活実態や考えを理解できるのか、など具体的な実践方法については、臨地実習指導者からの提案に頼らざるを得ない。錦織は、実習で学生はあるひとつの保健事業を素材に、ヘルスニーズの把握から計画、実施、評価に至る一連のプロセスを理解することによって、地域をどう理解し、どのように保健事業と関連させているのかという保健師がもっている地区把握の視点を学ぶことができると述べている[8]。地域の健康上の課題と地域看護活動とを結び付けて学ぶことができる実践活動の場を学生に提供できるのは、地域で実際に保健師活動を行っている臨地実習指導者である。臨地実習指導者は看護専門職の実践者として、学生が効果的に学習できるよう、その地域に特徴的な保健事業や地区組織活動などの具体的な事例を提示することが重要な役割であると考える。教員は実習前の臨地実習指導者との打ち合わせで、学生が可能な限りその地域に特徴的な地域看護活動に参加できるよう調整していく必要がある。

2．実習の準備とまとめを含めて実習期間を見直す

学生は、地域特性を理解する各学習活動に共通して、十分な時間がないなど「時間」に関して困難を感じていた。「既存資料による情報収集・整理」では、実習中の時間不足だけでなく、実習前に情報収集する時間がなかったという記載もあった。また、「キーパーソンや住民へ

NII-Electronic Library Service

Nagoya City University

のインタビュー」では、行った学生と行わなかった学生の両者とも、インタビューの対象者と自分の予定が合わなかったという記載があった。臨地実習指導者はいずれの学習活動に関しても、その目的・内容を明確にしてから行うよう学生に指導したと答えており、十分な事前の準備や学習を求めていると考えられる。

本学部の現在のカリキュラムでは、学生は本実習に出る直前まで臨床実習や講義を受けているため、実習前に実習施設で準備や学習を行う時間は設けていない。しかし、これらの結果から、実習を効果的に進めるためには、やはり事前に各実習施設の管轄地域に関する情報を収集し、インタビューや地区踏査の視点を明確にするなどの準備をしておくことが大切であると言えよう。さらに、事前に実習計画を臨地実習指導者と調整しておくことにより、学生が参加できる地区活動やインタビューできる場を設けやすくなると考えられる。また、本学部では実習終了後すぐに前期試験が行われるため、実習のまとめとしては学生個々に実習記録と課題レポートを作成することにしている。学生は参加した保健事業や地域特性を理解する学習活動、臨地実習指導者との意見交換などにより様々な情報を得ているが、限られた実習期間で体験できることは地域看護活動の全体からみると一部である。学生は、それぞれが学んだ成果を学生同士で共有することにより、学習の幅を広げることができる[2]。そのため、実習終了後にその成果を発表し実習体験を共有する機会をもつことは、効果的な学習につながると考えられる。限られた実習期間であっても効果的な学習ができるよう、今後、準備とまとめを含めた実習期間の見直しを検討する必要がある。

3．大学教育における地域看護学教育の特徴について臨地実習指導者の理解を得る

実習内容の単位数に対する意見として、「受け持ち地域の理解に関する学習」と「保健事業や家庭訪問に関する学習」の単位数については、学生に「少ない」と回答した者が多く、臨地実習指導者に「多い」と回答した者が多かった。また、「保健事業」の単位数については、学生に「多い」と回答した者が多く、臨地実習指導者に「少ない」と回答した者が多かった。この結果から、学生が体験したい実習内容と、保健師が学生に体験させたい実習内容が異なっているのではないかと考えられる。大学では地域看護学実習の目標を、卒後すぐに保健師活動を行える実践能力を身に付けることよりも、多様な場で看護専門職として機能できる基礎的な能力を育成することに重点を置いている[2]。本学部の実習でも同様に、学生が実習施設で多くの保健事業に参加して実践能力を身に付けるというより、地域の健康上の課題と地域看護活動を結び付けて考えられるような基礎的な能力の育成を重視している。しかし、実習現場の保健師は学生の実習指導において、「効果的な指導の方法が分からない」、「指導のマニュアルがない」ことなどに苦労している実情がある[5]。大学の実習目標や内容が、これまでの保健師養成所や短期大学専攻科と異なるため、実習指導を行う保健師にとっては戸惑いがあると考えられる[4]。本調査の対象である臨地実習指導者の保健師としての教育機関は、専門学校が80%以上を占めており、教育背景やこれまでの実習指導経験の違いが、実習内容の単位数に対する考え方に影響を与えていたのではないかと考えられる。

一般に、「看護系大学においては看護婦と保健婦とに必要とされる教育内容が看護学として統合して展開されるため、学生は保健婦像が描きにくく、保健婦になることが動機付けられにくい」と言われる[9]。平成14年の統計によると、看護系大学で保健師として就職する者は約1割である[10]。本学部における就職希望調査でも、保健師としての就職を希望している者は全体の約1割である。しかし、看護師として病院で働く場合にも、病院から在宅への継続した看護を提供することが求められる。また、卒業直後に看護師として就職していく学生の中には、看護師の経験を経て保健師や訪問看護師になる者も今後出てくるであろう。従って、大学は基礎看護教育において、地域看護学の基本的な機能や役割を学生に伝える教育を充実させていかなければならない。そのためには、このような大学における地域看護学教育の特徴について、実習施設の保健師と共通理解をはかるとともに、学生が実習目的・目標を達成できるように綿密な連携を図ることが重要である。

V　ま　と　め

平成15年度に保健所における地域看護学実習を行った本学部学生80人と、実習施設の臨地実習指導者49人を対象に、自記式調査票を用いた調査を行った。学生の調査内容は、実習内容の単位数に対する意見、地域特性を理解するための学習活動の実施状況と困ったことなどである。臨地実習指導者への調査内容は、実習指導体制、実習内容の単位数についての意見、地域特性を理解する学習活動に関して指導したこと、回答者の属性などである。学生71人(88.6%)、臨地実習指導者42人(85.7%)から回答が得られ、その結果から以下のような示唆を得た。

1．実習では学生が主体的に臨地実習指導者に報告・相談する姿勢を育てることが必要である。
2．地域特性を理解する学習活動を効果的に進めるためには、学内での講義・演習の方法を見直し、学生の学

NII-Electronic Library Service

Nagoya City University

習準備状態を高めるとともに、実習による学習活動の視点や方法についてより具体的に示すことが必要である。また、学生が地域に特徴的な地域看護活動に参加できるようよう、臨地実習指導者と調整を図ることが必要である。

3．限られた実習期間において学習効果を高めるためには、準備とまとめを含めて実習期間を見直すことが必要である。

4．大学における地域看護教育の特徴に基づく実習目的・目標について臨地実習指導者の理解が得られるよう、教員と臨地実習指導者が綿密な連携を図ることが必要である。

文　献

1）宮地文子：保健婦教育のあゆみ，保健の科学41（1），19-25，1999

2）村山正子：大学における地域看護学教育の現状と課題，保健婦雑誌，56(4)，270-275，2000.

3）諸沢洋子：特別区保健所における臨地実習の課題『看護大学』と『保健所』協働で機能強化を，保健婦雑誌，56(4)，300-305，2000.

4）勝又浜子：保健婦教育における実習の位置づけと今後の課題，保健師雑誌，56(4)，306-310，2000.

5）倉持一江(主任研究者)：保健所における看護学生等の地域看護実習の受け入れ状況に関する研究，保健所等における看護学生等の地域看護実習の受け入れ状況に関する調査研究事業報告書，全国保健婦長会，2000.

6）山口洋子，門間晶子，尾﨑伊都子他：保健所における本学部地域看護学実習の方法の検討，名古屋市立大学看護学部紀要，3，71-83，2003.

7）池田知子，美ノ谷新子，松下裕子他：学生の視点による地区踏査実習，保健婦雑誌，59(10)，960-967，2003.

8）錦織正子：地域看護教育における実習計画と指導地区診断(地区把握)，保健婦雑誌，56(4)，286-292，2000.

9）平野かよ子，今後の保健婦活動とその教育(1)，公衆衛生，64(11)，801-804，2000.

10）平成14年看護関係統計資料集，日本看護協会出版会，東京，2002.

（受稿　平成15年10月15日）
（受理　平成15年12月16日）

NII-Electronic Library Service